

広大への メッセージ Message to Hiroshima University

東京大学名誉教授、
東海大学特別名誉教授、
政策研究大学院大学名誉教授、
広島大学特別顧問

黒川清

Interview with Kiyoshi Kurokawa
Professor Emeritus of University of Tokyo,
Distinguished Professor of Tokai University,
Professor Emeritus of National Graduate Institute for Policy Studies,
Special advisor of Hiroshima University

広島から 世界へ飛び立て。

「ヒロシマ」という地名は世界に轟き、永久に残る地名です。つまり「ヒロシマ」

「ナガサキ」、そして「フクシマ」。原子力エネルギーにまつわる世界でも歴史的な地名が三つも日本にあるというのは、実に皮肉なことなのですが。

広島は歴史的にも地理的にも、二百



くろかわ きよし 1936年東京生まれ。
東京大学医学部卒業後、同大学大学院にて博士号を取得。
その後米国に渡り、UCLA医学部内科教授などを務める。
帰国後は、東京大学医学部内科教授、内閣府特別顧問、
WHOコミッショナー東海大学医学部長、日本学術会議会長、
国会による東京電力福島原子力発電所事故調査委員会委員長などを
歴任。2019年より広島大学特別顧問を務める。
(提供・政策研究大学院大学)

Expand your horizon
of education
from Hiroshima to the world

Prof. Kiyoshi Kurokawa is a special advisor to Hiroshima University. He highly recommends that those enrolled at the university go study abroad while they are still students. He also conveys the importance of directly experiencing "international standards" at overseas universities. He would like Hiroshima University students to continue their education in a way that makes them ask the question "Why?"

text by Fumihito Takase

五十年の鎖国、そして明治の開国以来百五十年の歴史の中で決して日本の最も重要な土地の名前ではありませんでした。しかし現代においては、東京のような中核ではなく周辺、けれど世界につながる場所です。実際の問題に向き合いつながる場所というものは、グローバル、しかもデジタル時代にはとても大切なことなのです。

私は越智光夫学長のお考えに共鳴して広島大学特別顧問をしています。学生さんたちと語り合うときには、「学生のうちに、海外に出てみることを強く薦めています。」

いま、座学中心の学習がメインの日本の大学教育は、限界に突き当たって

いるのではないのでしょうか。米国の多くの医学部では、学生の始まりの頃から実際にレジデントなどのチームの一員として患者を診る経験を積んでいます。「患者と向き合う」ということは、責任が発生すると同時に、プロフェッショナルとして専門職の基本をチームの中で自分自身でも学ぶことに通じます。そして、医学部の初期に基礎の科目がなぜ大事であるかということが理解できるのです。

今後、教育の質はさらに細かく世界の中で評価されます。米国では、国際基準で評価・認定された医学部の出身者以外、医師になれない制度が始まります(コロナ禍で実施年限が延長。そう

いった「国際基準」を肌で感じ、世界の中で何を学ぶべきかを意識することが求められます。

広島大学は、アリゾナ州立大学サンダーボードグローバル経営学部と提携して「広島大学グローバル校」を設置しました。日本にいながら世界的な学びの場に臨めるのです。

「HOW」しか教えていなかった日本の大学教育で、「WHY?」という問いを、いかに自ら発する、そして答えを求めていくのか。それは学生が身につけるべき本質であり、「大人の叡智」の根本をなすものです。広島大学の学生諸君には、「WHY?」を構築する学びを重ねていただきたいと思います。●